

# サルトルを書く

本多敬

## 第一章

---

### 第一章

レンブラントの「夜警」と、兵役時代のサルトルの集団肖像写真がスクリーン上に映し出される。サルトルの顔にスポットライトが当てられる。

時は1939年。舞台はドイツ国境沿いのフランス、アルザス地方の村。サルトルは兵役として気象測量部隊の任務に従事している。フランスの戦時法の規定により、民間人の家は軍用に供与されている。サルトルには家畜小屋のひとつが提供されている。藁、バケツ、シャベル、ライフル銃、何冊かの本、小さな机、そして、戦中日記のためのノート。日々の任務が終わり帰宅すると、執筆のための夜の時間が訪れる。そして、眠りは決して安らかなものではない。身体が冷え込む度に眼が覚め、母屋の居間に行って暖炉の火に掌をかざして暖める。暖炉の上には絵が飾ってある。居間には母娘がいて、いつも同じ椅子に座っている。彼女らはサルトルにあまり話しかけない。娘は編み物をしている手を止めて、温めた牛乳をサルトルに給する。サルトルは、牛乳を飲んだ後、家畜小屋に戻る。再び、草むらに寝転がり日記のためのノートを手取る。表紙には「奇妙な戦中日記」とある。雨足が激しくなってくる。起き上がり、机の前に座り、日記を書きながら独白。

### サルトル

九月十四日、木曜日。私は、これまで、戦争というものを見たことがない。私は戦争を把握することができない。しかし、戦争世界ならば見てきた。それは、単純な軍事世界のことだ。戦争は事物の意味を変えてしまう。戦中に兵隊を迎える民家では、歓迎という本来の意味が空虚となってしまう。つまり、自己破壊を孕んだ可能性というものは常に不条理になってしまう、ということだ。金欲しさに兵隊を歓迎する民家を目にするとき、ブルジョア的な自由の意味について考える。貨幣の自由のことを。これらの民家は元来、民間人の住宅を軍が徴用したものだ。兵隊の宿泊が保障されているが、その兵隊達には支払う金はなく、好き勝手にできるわけでもない。戦争の世界とは貨幣なき世界であり、また、自由も存在しない世界である。

「軍徴用」という張り紙を読む者ならば、そこに新しい意味が付与されていることに気付くはずだ。「強制と命令に基づく賃貸料の無償化」、という意味である。つまり、民間人の住宅は純粋な道具となったわけである。例えそれが高価な所有物だとしてもである。兵隊の宿泊のために供与すべき厳粛な義務を軍は国民に課している。旅行者の宿泊のために用意した愛らしい部屋もあるが、いったん

兵隊によって占拠されると、ただの巢穴の外観を呈するようになる。ベッドは通常家の者によって取り除かれ、仮に部屋に置かれていたとしても、そこに横たわることはできない。兵隊は藁の上に眠らなければならない。人間が作った物を爆弾が破壊する前に、すでに物の人間的な意味は崩壊してしまっている。戦争において、我々は道具世界の中を歩いているが、実際はそこは瓦礫の中である。物から微かな媚態を感じ取るその瞬間に、たちまち、そのような人間的な意味が消失した世界の儚さのなかに佇んでしまう。つまり、途絶えることなき幻想の反復。

戦争とは非常に重い道のりに喩えることができる。いかなる場所も、私の可能性の内部のなかに

存在しない。これらの空間は現実性を伴わない。仲間の兵隊達が「きれいな風景」とか「気持ちのいい村」と言い、「平和になったら、ここに戻ってくるぞ」と語るとき、これらの言葉は皮肉にも、私の深い喪失感を見事に翻訳する。

奇妙な事に、戦争は社会主義の形態をとる。軍隊は市民一人一人の財産を無と化す。集团的所有の管理下に置くからである。この洋服、この寝台、そしてここにある食料、どれひとつとして、私の所有物ではない。私は何も所有していないのだ。軍隊のなかで私が使用しているものは一つ残らず集団の所有物だから。ここでは、自分の付属物を形づくるのが不可能である。集团的所有の体制の中で、この私が所有の帰属点となることはあり得ないだろう。もともと、軍隊に入ったせいで自分の財産を無くしたということではない。もともと私は何も持っていなかったから。家は無いし、家具と本、装飾品も一切持っていなかった。レストランで食事をするための最低限必要な洋服はあったが、それぐらいのものだ。ところが、戦争は、そんな私に、集团的所有物たる道具の固まりを押しつけてきた。無論、私には持つ権利がなく、ただ使用するだけなのであるが。ヘルメットやマスクやベルトの類である。好むと好まざるとに関わらず、私はそのような社会主義の内部のなかに生きているのである。私は繰り返し信じていた。戦争は悲惨な犠牲を強いるけれども、自分を進歩させてくれる貴重な経験の源泉となるはずだ、と。進歩の観念は、運命の観念と対をなすものとして、私の中で最も重要な意義を持っている。たとえこれらを楽観主義である、と仲間達から咎められたとしても。

雨の単調な音。サルトルは、日記を書きながらいつのまにか眠ってしまう。頭上でバタバタと羽ばたく音がして、目を覚まし天井を見上げると、羽をいっぱいに広げた悪魔がふわっとサルトルの横に降り立ち、ノートを覗いて日記を読む。悪魔はサルトルに向かって軽く挨拶をすると、机の上のサルトルの眼鏡を取り上げ、これをかける。そして、メッセージを伝える始める。

## 悪魔

「戦争は悲惨な犠牲を強いるけれども、自分を進歩させてくれる貴重な経験の源泉となるはずだ。」おお、目覚めましたな、サルトルよ。あなたにメッセージを持ってきた。識別不可能なものは同一である、と神は語った。この原理に基づいて同一性を定義せよ、と命じておられる。サルトルよ、よく聞きなさい。つまり、 $X$ と $Y$ とが同一であるとは、 $X$ の持っているすべての性質を $Y$ も持っているということである、と。あなたは、対象の同一性を記号の同一性で表現できるのだ。迷うことなく、等号「 $=$ 」を使うのだ。以上。これが主からのメッセージだ。

サルトル 馬鹿な戯言です。二つのものについてそれらが同一である、と語ることは全くナンセンスです。スピノザも、「自然において同一の対象に二つ以上の実体は存在しない」と指摘しています。それからまた、一つのものについてそれが自分自身と同一であると語ることは、やはりなに事も語っていないのです。自己同一性「 $X=X$ をもって「思考の対象が存在する」ことを表現しようとするのは、大変ばかげたことです。そんなことをいったん許したら、巨大な怪物が人々の幻想の中で徘徊し始めることになります。あなたの主はドイツ人のように、相異なるものを同一化するという狂気に陥っているのです。

悪魔

息子、サルトルよ、あなたの方こそ、同一のものを互いに異質であるとみなす狂気にとりつかれているのではないか。

サルトル

お黙りなさい。等号の使用は馬鹿げているだけではなく、大変危険な認識です。例えば、ドイツ人＝（イコール）ユダヤ人、という妄想からは、決まって、ドイツ人＝（イコール）ドイツ人という自明を装った帰結に辿りつきます。こうして、自己同一性の等式から、ユダヤ人が追放されてしまう危険があるのです。ドイツ国籍を拒んでウイーン人として主張を通したフロイトは、失意の中で亡命を余儀なくされました。

悪魔

サルトルよ、あなたはユダヤ人を主張するつもりなのか。もともと、あなたはフランスのブルジョア出身ではなかったか。

サルトル フランス人？ユダヤ人？どうでもよいことです。自分の出自には関心がありませんから。確かに、パリに居た時は私に向かってユダヤ人と指差す者もいたのですが。ふん、連中は知識人というものが皆、ユダヤ人であると思い込んでしまっている。とにかく、囲い込まれた土地みたいに、私の意識の中に、ユダヤ人やフランス人、あるいはドイツ人というような実体が現れてくることはないのです。昼間は兵隊達と一緒にです。しかし、夜になると、ここで私はいつも一人ですから。

悪魔

サルトルよ、ひとりではない。その証拠に、あなたは、この私の姿をちゃんと見ているのではないか。あなたは自分の中の自分という自己同一性を否定した。確かに、あなたが感じ取っている眼差しが、自分自身を見つめる自己からの視線ではないならば、他者があなたのことを見ていることになる。私が、その他者であるとは思わないかい。

サルトル

知覚と想像力の間には本質的な差異があります。つまり、私があなただの姿を見ているときは知覚が働いています。つまり、カフェでポールを見ているときと全く同様に、視覚が働いています。しかし、想像力の作用とは、このような知覚の働きとは異なります。私は想像力を使って、あなたの存在を消し去ってしまうことができます。ちょうど、ポールという実体が私の想像力の土地から追放されるようにね。あなたもポールも私の意識の外に存在するかもしれないが、意識の中には存在しない。

悪魔

ならば、その想像力というものを使って私を消し去ってみよ。

レンブラントの「夜景」と、従軍しているサルトルの集団肖像写真が背景から消える。

悪魔

私は、まだあなたの前に存在している。どうした。どうも悪魔祓いに失敗したようだね。あなたが述べる意識というものはとても清潔な領域だ。ここら辺りの女学生のように白百合のように無垢で汚れていない。しかし、私は確かに存在している。あなたのその真っ白な意識のなかにね。そうだろう。

サルトル 違います。あなたは意識の周りに居るだけです。私の意識のなかには、誰も入ってくる事ができないのです。それは不可能なのです。

悪魔

ドイツ人も入れないのか。

サルトル

もちろんです。

悪魔

フランス人さえも。

サルトル

フランス人さえもです。

悪魔

それでは、ユダヤ人はどうなんだ。彼らもあなたの意識の土地から追放されているのかい。

サルトル

(しばらく沈黙の後) ユダヤ人という実体は存在しません。他者との社会的関係、他者からの視線との関係において、ユダヤ人は存在し始めるのです。

悪魔

よかろう。いまお前が認めた様に、あなたをじっと見ている他者が存在しているのだ。つまり。

サルトル

他者地獄。

悪魔

そう、他者地獄のことだ。私がおの他者なのだ。そうだろう。

サルトル

あなたは一体誰なんですか？

悪魔

（机上の読みかけの本にそっと触れた後、ノートを手にとる）私は見つめる本である。言葉であるサルトルよ、喜びなさい。言葉は、見つめる本からの眼ざしをいつも感じとることができる。そして、お前は言葉自身として存在していたのだ。

## 第二章

---

悪魔はノートをめくると、ある箇所を読み上げる。

慈悲深き白壁の宮殿に  
向かっていくこの降下には  
苦い欺瞞がともなう  
百万の監視箱にとり囲まれた人々  
雲の軍勢が、東に指差した超越者の時計台を超えて行進する  
と、風である、このわたしに、激痛がもたらされた  
「愛するひとよ、雨粒に打たれてはいけない」  
と、降下してきた裸の人が告げる  
ここで祈っても無駄  
もっと下に向かって降りていこう  
無調の氷のエクスタシーに誘われて  
アイロスの避難所のもとに、  
降りていく  
文学である避難所のもとに  
ひとびとの言葉の貨幣のもとに  
事物の内在的原因のもとに  
魔術である詩の息吹となるのだ

サルトルは小屋に唯一ある小さな窓へ向かってゆっくりと近づき、それを開ける。その途端に耳をつんざく様な車のクラッシュの音が飛び込んでくる。速度を上げた黄バンが平衡を失い、小屋の前の植木の一つに衝突する。煙を吐いている車から上背のある初老の男が慌てた様子で出て来る。パトリックである。パトリックはボンネットを開け修理を始める。母屋から母娘が出てくる。パトリックはせわしげに現場を見渡すと、車に向かって憤りの言葉を放つ。

パトリック

畜生、このポンコツ車め。ちっと、あんた、悪いが少し手を貸してくれよ。標識も何一つ無いこんな狭い道じゃあ、事故も日常茶飯事さ。

母

何て事なの、パトリック。大事な植木が滅茶苦茶ではないですか。

サルトルはうろたえる母にやさしくコートをかける。悪魔は、サルトルの背後に控えている。

母

メルシー、ムッシュー。（パトリックに向かって）お謝りなさい。

パトリック

道が狭くなって急にこの雨だろう、視界が悪かったんだよ。ほとんど真っ暗ってもんだ。（サルトルに向かって）あんた、この村じゃ見かけない顔だね。

サルトル

あなた、酷いじゃないですか。

パトリックは何も答えず、サルトルの背後をじっと見ている。背後に佇む悪魔の姿を強く意識するかのよう。

パトリック

あんた...

パトリックは僧侶が経を唱えるように、何かの名前のような言葉を一つ一つ、バンがぶつかった木の前で朗読し始める。

パトリック （呪文を繰り返すように）

o reche modo

to edire

di za tau dari do padera coco

サルトルは世の中にこれ以上いかがわしいものは無いという顔つきでパトリックの様子を眺めている。パトリックは、サルトルの眼差しに気づき、声を一層抑揚させマリア像の如く両腕を大袈裟に拡げる。しかし、その声の勢いに反し腕の動きはぎくしゃくとして心もとない。枝を手に取り、サルトルの前で、サッとお祓いをする。悪魔が退場。

パトリック

あんた、悪い友達につきまとわれていたね。あんたの心の中に居座っていたがね、もう安心だ。俺が追い出してやったさ。ところで、こんな辺鄙な土地に何しに来たんだい。

娘

気象観測のために軍から派遣されているのよ。

パトリック

ふーん、そいつはインテリの仕事だ。パリから来たのかい。そんな痩せた腕じゃ、鉄砲も担げないだろうし、その細い指じゃあ鉛筆しか握れないだろうな。それにしても、牛乳瓶みたいに分厚い眼鏡じゃないか。

パトリックは片手をポケットに入れ、ウィスキーの小瓶を取り出すと、キャップを外し酒を少量注いでぐいと一口で飲み干す。瓶をポケットに戻すと、息を整えてサルトルの顔を睨み付けて、強い語気で言い放つ。

パトリック

（唾を吐く）虫が好かない野郎だ。この土地から悪魔は追っ払っても、ユダヤ人とドイツ人は追い出せねえってことだ。

母

失礼な。いいかげんにお黙りなさい。

暗転。大きくなった雨の音が聞こえてくる。母屋の居間。母がサルトルを招き入れる。

母

どうぞ、遠慮せずに中に入ってください。娘に牛乳を温めさせていますから。

サルトル

メルシー、マダム。

娘が台所から牛乳が入ったミルクパンを運んで来て、暖炉で暖め始める。再び台所へ戻りカップを用意する。最初は上等なカップを運んでくるが、引っ込めて粗末なカップを持って来る。サル

トルは母と向き合う形椅子に座る。サルトルは立ち上がり、暖で炉の上に飾ってある絵を観察する。

### 第三章

---

娘が台所から牛乳が入ったミルクパンを運んで来て、暖炉で暖め始める。再び台所へ戻りカップを用意する。最初は上等なカップを運んでくるが、引っ込めて粗末なカップを持って来る。サルトルは母と向き合う形椅子に座る。サルトルは立ち上がり、暖で炉の上に飾ってある絵を観察する。

母

それは娘が絵の学校に通っていたときの作品です。娘はこうみえても才能ある画家なんですよ。

サルトル

（絵をしばらく観察した後）マダム、この天使のモデルはあなたですね。いつもこの絵を見ていたのに、今までどうして気がつかなかったのでしょうか。

（レンブラントの「夜警」がスクリーンに映し出される。光で輝くように絵の中央に描かれた天使の顔は母の顔であることが分かる。娘はミルクパンからカップへゆっくりと牛乳を注ぐ。サルトルは椅子に座り牛乳を飲み始めるが、絵のことがまだ気になる様子）

母

（ちょっと恥ずかしそうに）あまりまじまじと見てはいけませんよ。パトリックはカトリックの宗教画家なんです。もともとはプロテスタントの信者でした。母親は教養のある良家の出で、バルトークの音楽を初めて街に紹介したりした方で、何不自由なく暮らしていました。ところが、父親がベルリンで行方不明になって、家事など一度もした事の無い母親は当惑と貧困の中で息子を育てなければならなくなりましたですよ。いまはカトリックの擁護者のように振る舞っているパトリックですが、若い時分にアイルランドで売れっ子になるためにプロテスタントからカトリックに改宗しただけだという噂もあったり。あの人も昔はなかなかいい方だったのですが。

娘

お母様、もういいじゃないですか、そんなお話。ごめんなさい、退屈なお話をお聞かせして。

サルトル

いいえ、どうぞ、続けてください。

しばらくの間、三人とも顔を背け合ったまま動かずに黙っている。

母

娘が描いた絵を、実は私は大変気に入っているのですが、いかがでしょうか。

サルトル

（再び立ち上がり、額縁にそっと触れる）この絵の中央に位置している天使、女性、超自然的な存在は非常に輝いています。まったく垂直な照明で照らされているようです。あたかも、その照明は、キャンバスを照らし出す現実の光のようで、この輝きが私を捉えます。非常に奇妙で不自然な明るさと思いませんか。普通の絵は光が右側から、上から、左から、下から、とう具合に入ってくるもので、この絵の中でも、銃や楽器や旗を持った者たちはそのように照らし出されています。しかし、中央の天使だけは説明がつかない別の光源によって照らされています。絵の内部の中に存在しないかのように、何かが爆発しようとする瞬間のように、自らの内部を光源として光り輝いているようです。この女はイメージと光の塊であり、意識を形づくる、物質的内在性として存在しているのですよ。

しばしの間。

母

絵のことが大変お詳しいんですね。美術について勉強をなされたことがあるのでしょうか。

サルトル

いいえ。絵の専門家ではありません。パリで研究していたのは哲学です。ただ、戦前に、知覚とか想像力の働きについて熱心に考えていました。映画のことを考えながら本も書きました。

母

とても興味深いお話だわ。昔父に連れられてパリを訪れる度に映画を観ましたの。このごろは全く観る機会がありませんが。今度あなたの本のお話を聞かせてください。今夜はあんな事で起こされて動揺していましたが、あなたのお話のおかげで気持ちが落ち着いてきました。今夜はこれで失礼致しますわ。

サルトル

僕も失礼して、小屋に戻ります。牛乳をご親切にありがとうございました。おかげで、身体が温まってきてよく休めそうです。おやすみなさい、マダム。また、明日。

母

おやすみなさい、ムッシュー。（絵の方へ歩み寄り、額縁の汚れをナプキンでサッと拭く）ム

ッシュー、また明日。

母が退場。

娘

最近はおっぱら辛かった昔の話ばかりだったのですが、でも、今日は久しぶりに少し楽しそうな母を見ました。少し興奮していたみたいです。この絵を分析なさったあなたの言葉は大変興味深いものでした。パトリックも、そしてあなたも、説明のつかない光源からやってきた人達に思えます。

サルトル

（ドアの前に立ったまま）絵のお仕事はどこでなさるのですか。

娘

いいえ、今は絵は描いていません。昔美術の学校で理論と歴史を学びましたが、もう全く描いてないんです。母は創作を続けて欲しいようですが。だから、あんな風に言ったんです。今は時々小学校で子供たちに本を読み聞かせるアシスタントの仕事をしています。ゲームで、一緒に詩を創ったりしますわ、子供達と。子供でも、いえ、子供だからこそ、とても面白い詩ができるのですよ。私は詩が大好きで、ずっと思索を続けています。ところで、あなた、ドイツへ行ったことがありますか。

サルトル

はい。この戦争が始まる前に研究していたハイデガーの講義を聴こうと思い立ちハイデルベルグへ行きましたが、願いは果たせませんでした。1939年に戦争が勃発した時から、我々の視野はいわゆる実存主義的といわれるものによって変わって行きました。思い出します。特にドイツによるチェコ共和国併合の後、三月の夜、ヴィクトリー通りのビストロにいた時でした。私はそこでハイデガーを読んでいました。彼の思想に傾倒していたのです。皮肉な事です。ドイツが生んだ哲学を愛しながら、ドイツを敵国として憎まなければならない訳ですから。

娘

そうでしたか。パトリックのお母様は一年ぐらいかけてドイツを回ったそうです。ご両親は二人ともドイツにご縁がある方だと聞いています。ここはドイツとの国境に近い村ですから、ドイツに出稼ぎに行く人も沢山いました。昔から、ドイツと縁がある土地なのです。実は私が子供のときですが、パトリックから絵の描き方を習いました。それから詩を沢山読み聞かせてくれました。それらは皆いい思い出です。パトリックもお母様も本当にいい方達ですが、ドイツとの戦争が始まって。村の人達は猜疑心がとても強く、戦況が悪くなるに従ってあの人に声をかける人が少なくなってしまったのです。パトリックは毎日のように飲んだくれるようになって。

サルトル

実は、僕も兵役についてから、詩を書き始めました。忙しくてじっくりと長い文章を練る十分な時間がなくなりましたから。しかし、どんなに忙しくても、短い詩ならノートの端に書きつけることができます。事物を関連づけて考えることに、詩が大変役立ちます。ところで、詩は、いつもノートに書きとめていらっしゃるのですか。それとも。

娘

(少しいたずらっぽく) あなた、ご覧になられますか。

サルトル

もちろん。

娘は立ち上がり暖房へ近づき、上にかかっている絵を取り、サルトルに近づく。キャンバスを裏返し、サルトルに差し出す。サルトルは少し驚いてそれ受け取る。

娘

母には内緒ですけれど。

キャンパスの裏側に、娘の詩が書きつけてある。サルトルはそれを黙読し始める。背景からレンブラントの絵が消える。雨の音。サルトルは朗読を始める。

雨の恩寵を浴びながら

とぼとぼと歩いた、裸足で

気づかなかった

雲の隙間からこぼれた陽光に

地面の若葉が輝いていても

女には掌の骨しか見えなかった・・・

はじまるのはテーブルから、  
椅子のときもある  
靴だったかもしれない  
でも戻って来てしまうのはここ、  
なにもうつらない鏡  
崩壊の静寂さ  
わたしはこの土地を  
さまよった  
どこにもいた  
けれども、わたしの土地はみつからなかった

## 第四章

---

小屋の中。雨の音。サルトルは机で日記を書いている。書いた文を朗読しながら推敲する。レンブラントの「夜警」と、従軍したサルトルの集団肖像写真が、再びスクリーンに照らし出されている。サルトルは日記を綴る――

男達が戦争の話を始めると、きまって居心地悪くなるものであった。皆がわざとらしく、自信たっぷり、これは男達の問題だと匂わせる。それでいて女達になにかを期待しているようなのだ、仲裁役のようなものを。それは女達が出征しないからであり、争いから超越しているからだ。「行かないで」。それとも「頑張ってきて」。決めるのは女達ではなかった、という風に。女達が出征することはないからだ。あるいはこんな風に、「お好きなようになさって」。しかし、女達にもどうしたものか分からないに違いない。

九月十七日、日曜日。

ロシア軍がポーランドに侵攻した。5時に、手紙を持参したポールから、このニュースを知らされた。大変不安である。私が戦争を容認しているのは、ただ勝利をもたらす限りでのことなのだ。一年以内に戦争が終結し、全部元通りになるはずだ、と考えていた。しかし、こんな確信がいかに愚かな思い込み過ぎなかったかということを理解してきた。厄介なことに、取り返すことができない過去が人生の傷口のように、私のなかでチクチクとうずき始めた。

九月十八日、月曜日。

戦争という幻想。カフカが描いた奇妙な戦争。私はそれを感じ取ろうとは思わない。戦争は私から逃れていく。戦況を伝える公式発表には、フランス側の損失に言及する言葉がない。私はまだ負傷兵を見ていない。軍曹は毒ガスの被害状況について語っているが、否定する者もいる。はっきりしない断片的な情報。敵は我々の領土には姿を現さないし、背後からの爆撃音も聞こえてこない。結局、これがブルジョアに顕著な態度というものだ。私が戦争を引き受けるのは、生き残ればの話だが、戦前の体制への復帰を望んでいるからであるが、しかし、こういう態度は本質的に、ミュンヘンの群集の態度と同じ類のものであろう。民衆は生活苦を克服すべく戦争のために結集したが、自分達を搾取してきた資本主義の終焉を望む者は誰もいないのだ。スターリンはヒトラーと停戦協定の合意を取り交わした。5時、隣家のラジオから絶叫が聞こえてきた。ヒトラーの演説が始まったようだ。学校の教室で小説を書いていたときのことである。「万歳！」とドイツの群集が叫ぶ。

九月二十六日、火曜日。

意識の一般的状態。黒と青に分かれた二人のボクサーが殴り合っている。不快な空気のなかで、見物客達は「うまい作戦じゃないか」などと互いに呟く。戦争もこれと同様。公式見解を鵜呑みにする者は誰もいないし、フリーメーソンの呪いの如き胡散臭いスローガンの傍らで、スペクタクルな力と力の対決、武力的な闘いが繰り広げられている。政治家による芝居じみた演出。観客

全員が陰謀の背後に隠された真相を暴こうと必死であり、「だまされてたまるか」が彼らの合言葉となっている。

九月二十七日、水曜日。

パレンの言葉。もし諸君が戦争の原因を造り出し受け入れるとしたら、諸君はそのことによって共犯である。しかしこの言葉は正しくない。第一に、戦争の原因を造り出すことと、戦争の内部に存在することを区別すべきだ。フランス人の中には、兵役を放棄し脱走する行為によって、戦争を造り出す事を避ける者も居る。しかし、戦争の内部に存在するということは避けられないのだ。そういう意味で、戦争は「世界一内一存在」を規定している。戦争は私の冒険などでは決してない。私は自分の振舞いに関して選択する余地がないから。戦争が存在する所以は、世界のために、なによりも世界の

中に在る私のために、なのである。私の運命はここから始まる。戦争は病気や結婚や死のような場合とは異なる。それは私の運命の中に入り込んでくるのではなく、反対に私の運命が戦争から生まれ出るものだから。私は一人の人間であることに応じて、「戦争に向かったの存在」であるといえよう。私は人間的

条件に対してと同様、戦争に対していわば「否」という言葉を突きつけることができないのだ。

十月一日、日曜日。

ヒトラーとスターリンの、いわゆる平和戦略が大きな混乱を招いている。今朝目撃した兵隊達はこれに納得せず不平の言葉を述べていた。他の兵隊達は未来に希望を抱いていた者も居た。

十月二日、月曜日。

空虚な心のなか。毎日任務の処理に追われているだけ。私の小説は忍耐強い凡庸な役人が書いている。ジッドの本。手紙。観念の欠乏。事物を関連づけて考えるということもない。もしかしたら、戦争が不自然でなくなってきた証拠かもしれない。自分は一日中軍隊のなかで生活しているし、思考の倦怠は特別驚くに値しない。そうだ。驚きの欠落、このことが私の思考経路を塞いでしまっている原因だ。一日中離さず持っているこのノートに、言葉を書くという欲求。厚いジッドの日記を前にすると、ナーブな誘惑に陥る。私が欲しいのは、私自身の戦中日記、これに似た厚い本なのだ、と。しかし、

冒頭の箇所から、「B」のことや「ワング」のことをあからさまに書き記している。さらに困った事に、私は、いわば通常の市民生活といわれるものの実体を想像することが不可能である。ノートに書きつけたものはといえば、文法を無視して乱雑に組み立てられた端書きの束。つまり、文法に従わせるたとたんこれらは平坦な文になってしまうだろう。この日記を出版することを真剣に考えるならば、推敲と編集を行う必要があるだろう。しかし、これは一種の欺瞞行為ではないだろうか。戦中日記において貫かれた本来の精神に対する決定的な裏切りなのではないか。

十月三日、火曜日。

戦争はいかに現在の自分の態度の決定に寄与したか。いかなる要因が働いたか。私は日記を通して明らかにしていくつもりだ。復活祭のとき、イタリアによるアルバニア侵攻が起き、私は友人達とニースの方向に下山した。私は友人に、「戦争一内一存在」という原初的な状況のことを説明し

ようと努力した。複雑で思考不可能な実存的な状況を、私は理解し感じ取っていた。1930年以降、世界的不況、ナチズムの到来、シナ事変、スペイン戦争が、我々の眼を開いていった。大地が我々の足元から崩れてゆくように思われ、そして突然、我々にとってもまた歴史的なかすめとりが始まった。

十月四日、水曜日。

カフカが描いた「城」。カフカは遅れの不条理を表現したのだ。私は信じている。いまになってやっと理解し始めたのだ。戦争の本質とは憎悪に存するというところ。戦争を現実化させた者は皆、有罪である。戦争はどの時代にあっても、歴史的な偶発事、ただし常に回避可能な偶然性である

ことを知るべきである。戦争とは結局、脆弱で愚かで絶望的な人間の「世界一内一存在」、人間的現実性の側面なのだ。

## 第五章

---

30年後の1969年。大通りに面したパリのカフェ。サルトルは本となった「奇妙な戦争日記」を横にいるボーヴォワールに手渡す。ボーイが暖かい牛乳を運んでくる。サルトルはチップを渡す。レンブラントの「夜警」と従軍したサルトルの集団肖像写真がスクリーンに照らし出される。ボーイが退場。

ボーヴォワール（日記を読む）

十月九日、日曜日。戦争で最も憎むべき事とは、孤独なき孤立というものである。すなわち、孤独の力を伴わない単なる孤立状態のこと。このような孤立は工場労働者が直面している状況を説明している。結論。孤独なき孤立とは、私の中に蝕む嫌悪すべきブルジョア的な側面である。十月十八日、水曜日。早朝、激しい銃撃戦。ドイツの攻撃について思考を巡らす。思考を否定することは絶対に不可能だ。この瞬間に確かに起きている出来事なのだから。私は感じる。彼らが破壊を望んでいる世界に属している自分自身を。私はその世界に帰属しているのだ。自分自身の帰属について思考を巡らす。思考を否定することは絶対に不可能だ。破壊の対象である世界、かつて平和であった世界、その世界は私が人間として存在した場所である。ドイツとフランスによる相互破壊とは、私が所有する破壊を意味する。

音楽とともにゴダールが登場。

何か動作を始める。街の人AとBと悪魔と一緒に登場。三人は舞台に座り、観客に対して背中を向けた姿勢でゴダールのパフォーマンスらしきものを見ている。ゴダールは奇妙な格好をしている。ラケットを持ってテニスウェアを着て白い帽子をかぶっているが、サッカーシューズをはいている。靴下はフランス国旗の配色。葉巻をくわえている。テニス・ウェアはブルジョアの象徴であり、サッカーの靴は労働者階級の象徴である。待ち構えるレシーバーの姿勢。沢山のテニスボールが下手から来るが、反応しない。不動の姿勢。正面を向く。静止。それからターンする。沢山のテニスボールが上手から飛んで来るが、全然反応しない。（人物を回転させるという映画の動きを嘲弄したパフォーマンス）。それから、サッカーボールが転がってくる。ゴダールは蹴り返す。ターンして、右から転がってくるサッカーボールを蹴り返す。（カメラのパンを嘲弄したパフォーマンス）。サルトルとボーヴォワールは不審げにその様子を観察している。ゴダールは軽く彼らの方に挨拶する。

サルトルはボーヴォワールに、あれは誰かと訊ねる。

ボーヴォワール

ジャン＝リュック・ゴダール。フランソワーズの仲間のひとりよ。

サルトル

フランソワーズ？

ボーヴォワール

フランソワーズ・トリュフォー。カイエ・ド・シネマのバザンとシネマテイクのラングロワの所にいた映画批評家達よ。「良質なフランス映画」を、ポナパリティズム、体制迎合主義の欺瞞としてこきおろしたグループよ。

サルトル

ああ、アメリカ・ギャングを称賛しているプチブルのチンピラどもか。どうも

この私も批判の槍玉にあがっているらしい。「サルトルの万年筆カメラは、カメラを意味のギロチンの下敷きにして二度と立ち上げれないようにした」、とね。

ゴダール、逆立ちを始める。

サルトル

それで、ジャン＝リュック・ゴダールも、ヌーベル・バーガーなのかい。

ボーヴォワール

そうよ。最近の映画では、ジェーン・フォンダと一緒に仕事をしているわ。あの人、ブレヒト派だから、アクロバットで、あなたに敬意を表しているつもりなのよ。

サルトル（ゴダールに呼びかける）

おい、ジャン＝リュック、お前はテニス選手なのかい。それとも、サッカー選手のつもりなのかい。

ゴダール

両方です。テニスとサッカーの両方ですよ。

サルトル

両方だって。それは奇妙だな。

ゴダール

フランスでは、テニスはブルジョアが遊ぶスポーツで、サッカーは労働者階級のスポーツと決まっています。ところが、僕達スイス人は違います。二つを区別することなく、

テニスもすればサッカーもするのです。

サルトル

スイス人だって。君はフランス人じゃないのかね。

ゴダール

両方です。僕はスイス人であり、フランス人なのです。

ボーヴォワール

彼はアルジェリア戦争で徴兵を拒否するために、スイス国籍を取得したのよ。

サルトル

二重国籍者か。（ボーヴォワールに向かって小声で）ふん、プチブルの避難所という訳だな。そうだろう。（ゴダールに向かって）ところで、ジェーン・フォンダを使った映画はフィクションかね、それともドキュメントだったのかい。

ゴダールはサルトルに近づくと、テーブルの上にある「戦中日記」を手に取る。ギロチンの刑みたいに、本を水平に自分の首の下に当てる。（映画のいわゆるスターシステムと相補的なクローズアップを批判したジェスチャー）。ここでは、社会派ハリウッド・スターであるジェーン・フォンダに対する嘲弄、と同時に、サルトルに対する挑発のジェスチャーの意味である。

ゴダール

両方ですよ。フィクションであると同時に、ドキュメントです。ドキュメント

であり、フィクションです。私の映画は常に二重国籍者なんです。残念な事に、ジェーンはついにこの事を理解することはなかった。サルトルさん。

街の人A（立ち上がり、サルトルに握手を求める）

サルトルさん、皆のために頑張ってくださいよ。（ゴダールの方を見て）エゴイストめ。俺は、お前達ヌーベルバーガーを絶対に許さないからな。畜生、映画を難しくしやがって。

ゴダール

メルシー。

サルトル（ゴダールに向かって）

構わないから、ポールと呼んでくれ。

ゴダール

では、ポール。僕は戦争に関して、あなたに同意できないことがあります。（「奇妙な戦中日記」を開き、一文を読み上げる。）「私は一人の人間であることに応じて、戦争に向かったの存在である。私は、人間的条件に対してと同様、戦争に対していわば「否」という言葉を突きつけることが不可能なのだ。」ここで僕は、サルトルという思想家の真相が分からなくなってしまう。ポール、あなたは、戦争をあまりにも文学的に扱い過ぎています。戦争は歴史なのです。歴史である以上、社会的に捉えるべきですよ。戦前のドイツの帝国主義は、今日のフランスとアメリカによる植民地主義と同様、暴力を本質とした支配です。この暴力は歴史的に捉えられるべきとは思いませんか。あなたがやったように、歴史を人間的な条件に還元すべきじゃありません。「奇妙な戦中日記」は明らかに失敗作です。歴史を不当に無視しています。ポール、この他に疑問に思っていることがあります。今日は是非伺っておきたいのですが、それは。

サルトル（ゴダールの言葉を遮り）

ジャン＝リュック、歴史を無視しているのは、君達プチブルのヌーベルバーグだよ。君達が崇めているオーソン・ウェルズの映画は、歴史を嘲弄しているしね。結局、フランス映画、いや全ヨーロッパの映画が壊滅させられてしまったのだ、君達が擁護してきたハリウッド映画によってね。

ボーヴォワール

ハリウッド映画と、それからテレビ産業ね。

サルトル（冷静に）

ヌーベルバーグはファシズムを生み出した戦前のミュンヘンの民衆と全く同じだよ。新しい感性を築くために言論と表現の戦いへと結集するけれど、フランスとヨーロッパを搾取するアメリカ資本主義の終焉を望むものは誰もいないという意味でね。

ゴダール

確かに、ハリウッド映画には過大評価を与えてしまいました。僕はこの点を自己批判しています。ポール、私の疑問とは...

## 第六章

---

街の人B（サルトルに向かって本を差し出し）

サインしてください、サルトルさん。（サルトルはサインに応じる）ありがとうございます。  
頑張ってください、サルトルさん。

街の人Bはゴダールを見る。憤りの表情。抗議しようとするが、言葉が出てこない。睨みつけながら、そのまま退場。

サルトル

自分達は署名をしない癖に、他人にはサインをさせたがる輩。

ゴダール

僕の疑問は、ポール、あなたはベトナム反戦運動の署名活動や抗議文の配布や集会のスピーチで、毎日一時間を費やしていますが、その後、ご自宅の書斎にこもってフローベルの研究で八時間を費やしていますよね。どうして、そのような両立が可能なんですか。

サルトル

両立は可能だ。君のテニスとサッカー、フランス人とスイス人、ドキュメント映画とフィクション映画、のよにね。（ボーヴォワールの方を見て笑う）

ゴダール（むきになって）

不可能ですよ。

サルトル

可能なのだ。君のために説明してあげよう。一言でいえば、フローベルは表象の芸術だ。それに対して、我々が関わっている自然発生的な革命運動というのは、純粋なイメージの芸術として捉えることができるだろう。表象とは、純粋なイメージに付け加えるものがなにもない状態だ。よって、表象とイメージは互いに独立したものであるがゆえに、両立することが可能なのだ。

ボーヴォワール

「ボヴァリー夫人」と毛沢東主義は両立するのでしょうか？

ゴダール

表象とは純粋なイメージに付け加えるものがない状態、とおっしゃることには

同意します。しかしさらにもっと探求しなければならないのは、「表象は盗みである」という問題ですよ。

サルトル

ジャン・リュック、何が盗まれると言いたいんだね。

ボーヴォワール （サルトルに向かって小声で）

ゴダールの盗み癖は有名なのよ。シネマテイクのレジのお金を盗んで出入り禁止になったし。いまでもコダック社の高感度フィルムを時々盗みだしているという噂よ。子供のとき、祖母の蔵書のジッドの初版本を書斎から盗んで売り飛ばしたという話も耳にしたわ。

ゴダール（咳払いして）

僕は肖像画のことを考えています。肖像画の傑作を産み出したベラスケスの作品とかに見られる肖像における「表象」のことです。僕は「表象」という問題を映画のなかで取り扱つかおうとしました。そして、現実が再生産される、あるいは再現される際に、剰余価値が生み出される、とアルチュセールが言ったことを理解し始めています。つまり、「表象」とは盗みではないか、と疑い始めているのです。そして、マルクス主義の剰余価値の概念は、映画にとって、表象行為に関して生じたブルジョア的幻想と闘うための強力な武器になるはずなんです。

ボーヴォワール

確かに、女性達は自分達の肖像画を必要としています。

サルトル

それでは、いったい誰が盗むのか。

ゴダール

良質なフランス映画とハリウッド映画、そして、それらを消費する中産階級です。

ボーヴォワール

盗むのは男性達。

サルトル

誰が盗まれるのか。

ゴダール

民衆です。1789年のときはフランスの農民達でした。現在は中国とベトナムとパレスチナの農民達です。

ボーヴォワール

そして、盗まれるのは女性達。（スクリーン上の「夜警」を指差して）男性達は自分達の姿を女性の肖像に内に描きこんできました。市民という名の一人の男に対する、ある女の譲歩には、身体、魂、財産の譲歩など、際限がありません。市民生活の現実、女性達が世界の根底を攻撃することを妨げています。そして、この絵はサルトルの限界を表現しているともいえるのです。実存の哲学が暗黙に前提しているのは、人間イコール男性という等式ですから。結局、実存的実体の独立性を享受できるのは人間、すなわち男性だけ、ということを理解すべし。こうして、サルトルは、実存である自由を男性だけに約束しました。女性達に対して無関心だからでしょうか、それとも、女性が隷属であることを本質と考えているからでしょうか。これが、女性達が盗まれているという意味なのです。

サルトル

一体何が盗まれると、君たちは主張しているんだ。

ゴダール

イメージです。宇宙全体を抱擁する愛のイメージです。

ボーヴォワール

主体としての、女性達のイメージです。

ゴダール

アメリカ資本主義の支配だけが問題なのではありません。アフリカ、アジア、ラテン・アメリカの農民達からすると、アメリカもヨーロッパも、フランスも日本も同じ支配者の類です。一体何故、第三世界の農民達は、フローベルが描いたヨーロッパ中産階級の没落を心配しなければならないのか？（スクリーン上のレンブラントの「夜警」を指差す）あの天使として描かれた女性を見て下さい。自分達を代表できない、声なき声達です。燃えているのが見えませんか。抗議の火によって燃え上がっているのです。あなたが唱えている様な、内在的な、純粋なイメージの光とは全く関係がありません。不動のまま、凍りついたような恍惚の中に浸っている沈黙とも関係ありません。あの女は、自由を声高に求める人々の反抗を表しているのです。ポール、あなたは

、飢えて死んでいく子供の前では、自分の文学である「嘔吐」はなんの価値も無いことを認めました。しかし、あなたは、フローベルなどという中産階級の文学を擁護している。

スクリーンに「WRITING + EN-tRANS = WRITING」という文字が映し出される。

サルトルが詩を読む声だけが聞こえてくる。

わたしのところは

鍵のかかっている自分だけの部屋

それはたった一つしか座席がない映画館

ほかの人はだれも入ってこれない、でも

迷い込んだ一匹のBE昆虫だけが

本を書くこと

暗闇とナルシズムのなかで

BEである透明な憑依に誘われて

WRITING + EN-tRANS = WRITING

## 第七章

---

悪魔が立ち上がり、観客に向かって訴える。

悪魔

ひとたび自由が爆発したら。人間の魂の中で、ひとたび自由が爆発したら、もう神々はその人間に対して何をする事もできない。サルトルよ、私が燃え上がろうとしているのが見えないか。

悪魔がサルトルの前に進んで向き合う。ゴダールとボーヴォワールが退場。

サルトル

あなたでしたか。あなたと出会ったのは、確か1939年でした。ちょうど三十年前のことです。なにもかも、変わってしまいました。あれから、ナチスと戦いパリ解放を実現した英雄達はアルジェリア人たちを拷問しました。パリを解放したアメリカは今日、フランス人と日本人に代わって、ベトナムを爆撃しています。あなたは、三十年間、何をして過ごしていたのですか。何故、黙っているのですか。

悪魔、無言のまま、スクリーン上のレンブラントの「夜警」を見上げている。

サルトル

私ははっきりと覚えています。あの時、あなたは自分のことを、「私を見つめる本だ」、と言いました。そして、「私が言葉である」と言いました。「本の中の言葉だ」と。（「奇妙な戦中日記」を手に取り、悪魔に渡そうとする）もしあなたの言うことが本当ならば、この「奇妙な戦中日記」は我々の肉体ということになるでしょう。私の日記である、と同時に、我々の日記なのです。「サルトル、悪魔と奇妙な戦中日記を書く」。そうでしょう。

悪魔（サルトルを無視するかのごとく、「夜警」の天使を指差しながら）

お前は、この私から天使を奪ってしまった。私は片割れになってしまった。お前は、純粋なイメージの光を盗んだ。私お前のもとに、復讐を遂げるためにやってきた。悪魔とは実は、お前のことだったんだ。言葉なんか糞食らえ。

サルトル

どうということですか。

悪魔

これが地獄というのか。いいや、違う。硫黄の匂い、火あぶり台、火あぶりの剣。とんだお笑い草だ。火あぶり台なんてものが要るものか。地獄、それは他者のことだ。

妖精カリヴァンの

大地よ

プロスペローの墓である汝よ

マストを立てよ

死と

眠りが

復活するのだ

o reche modo to edire di za tau dari do padera coco

悪魔はサルトルの首をゆっくりと絞める。サルトルは倒れて眠ったようにそのまま動かなくなる。悪魔はサルトルのジャケットとズボンを脱がして、それを着る。サルトルの靴を履く。最後に、奪い取った眼鏡をかけ、本を持つ。それから、スクリーン上のレンブラントの「夜警」の前にゆっくりと進み出る。絵中央の天使の女性に言葉をかけるが、言葉は聞こえない。叙事詩風の音楽。真正面からの照明の強い光。スクリーンと悪魔の姿が見えなくなるほどの大量の光が浴びせられる。

爆発音が二回。オルガンのミサ曲。

スクリーンにはなにも映っていない。自爆テロだった？

## 第八章

---

サルトルが詩を読む声だけが聞こえてくる。

スクリーンに「WRITING + EN-tRANS = WRITING」という文字が映し出される。

わたしのところは

鍵のかかっている自分だけの部屋

それはたった一つしか座席がない映画館

ほかの人はだれも入ってこれない、でも

迷い込んだ一匹のBE昆虫だけが

本を書くこと

暗闇とナルシズムのなかで

BEである透明な憑依に誘われて

WRITING + EN-tRANS = WRITING

1939年にあらわれた、たった一つしか座席のない映画館。その目的はいったい何だったのか。

見せたかったのは

石であるカチカチに固まった宇宙卵から外へ脱出する花であった

サルトル、悪魔と一緒に舞台に登場。1939年の兵隊の格好で日記を書いている。悪魔はノートのパージをめくる。

## サルトル

とによって守りたいとする世界を破壊することになるのだが。そもそも、守るべき世界は既に崩壊してしまっている。私は1919年から1939年までの人生を守りたいと願って、ここに来た者だ。私がここに存在するということは、予想すらできない新しい世界を創り出すことを意味している。こうして、1914年の人間はドイツの帝国主義に抗して、1920年代のフランス共和国を守ろうとする。しかし、実際に武器を手に持った者たちが互いに行っていることは、1870年から1914年に至る共和主義の埋葬にほかならない。1939年まで私が愛した文化。パリのメニルモンタント、モンマルトル、モンパルナスといった場所。そこで真の人生が開花した。私を取り返そうとしている、もはや失われてしまった時間。シュールリアリスト、ミッチェルやレイリスが活動した場所。いまもまだ暮らしている者が居るし、彼らの後若い人が次々にやって来た。私は、我々は、その世代の内部のなかに存在しているのだ。私は信じている。他の者が自分達の国を愛するのと同等の排他性と熱狂と特権をもって、私は自分の過去を熱烈に愛している、と。しかし、これらの文化的盲目性を他国に押し付ける傲慢さには、私は軽蔑の念を覚える。1920年から25年までの間にすべての決定的なものが誕生した。レーニン、フロイト、シュールリアリズム、革命、ジャズ、サイレント映画、これらすべてが、同時に現れ、互いに絡み合っていた。二十年代が創り出した夢の世界。これは私の記憶のなかにしか存在しなくなった世界なのであるが。

奇妙なこと。共和国フランスを守るために武器を取ること。皮肉にも、そのこ

サルトル、沈黙のなかで日記を書き綴る。

逆光の効果。サルトルのシルエットだけ。 観客にはサルトルの顔が見えない。

暗転。

(注)

サルトルの日記の部分は、フランス語の原著「Carnets de la dr&ocirc;le de guerre」（ガリマール社、1995年版）と雑誌「New Left Review」59号に掲載された「Jean-Paul Sartre, Unpublished War Diary」を参照しながら、作者が意識を行った。